



(山)自然の中の光と闇の功罪

(日本山岳文化学会:評議員)

2006.09.14 田中^{たなか} 文夫^{ふみお}



自民党総裁選挙さ中、今朝の朝日新聞朝刊一面のトップ記事は『小泉改革が「**バラバラ感**」生んだ』と題し、小泉改革の<光と影>にスポットを当て、総裁選挙立候補者たちの<ポスト小泉論>を端的に紹介しています。

昨日、NPO法人 山のECHO:上幸雄 代表理事から戴いた上記標題<・・光と闇・・>はすぐさま新聞記事と重なり、<光と影>へとリンクします。両者は一見同じように見えますが、その本質は異なります。<光と影>の関係は光を照射する主体側が定めた一方向性があり、その対極に影が生じ、次元を等しくしています。他方<光と闇>の関係は、自ら光を放つアクティブな主体と、自ら黙して闇と化すパッシブな主体という、自立しながらも異なった立場にある複数となる主体が存在しますが、必ずしも同次元とは限りません。もしそれらが次元を同じくした場合、相互に関わる相対的で双方向な関係が生じます。さらに次元を異にすると、光と闇の相関関係は無となりましょう。

<光と影>として採り上げられた小泉改革は「規制緩和、競争社会、既得権益打破」という光の<功績>に対し、「モラルハザード、弱肉強食格差社会、既存社会制度破壊」とする影の<罪>を発生させました。朝刊の一面を飾る「**バラバラ感**」は、その批判的帰結を総括しています。また、社会の中で自我を主張できない気弱で真面目な層は<引きこもり>現象を増大させ、<闇>なる部分を拡大させてもいます。

今、「**環境の時代**」と認めれば、人間のむき出しな欲望のままに振舞ってきたこれまでの文化・文明に対し、人類の存続と持続的進化を継続させるためには、これまでの人類史を創造的に見直さなければなりません。人類共存の為に、自立した個の欲望をどのように抑え、社会の中へ整合させたら良いのかが今問われています。他方、人類の二極化を肯定し、支配者と服従者の固定化を認めるならば話は別となります。しかし私は対等な個を単位とする存在を基礎に、自由な意思を尊重しながら共存共生してゆく人類の知恵を支持します。地球環境の中で限界を知るに至った人類の、無限と有限な環境の狭間で、新たな英知と新たな技術を発揮させる時であります。まさに旧来の自民党をぶち壊すだけでなく、これまでの世界を創造的に改革する時節です。

太陽系惑星・地球における**光**とは**太陽光**を意味しますが、光は電磁波の一種である可視光な波長帯域(380nm~780nm)を持っています。波長の違いは色としても把握され、短い

波長は青から紫色となり、長い波長は橙から赤色となります。それらは虹のカラー配色として、雨上がりの天空に半円のリングを架けます。もっと短い波長は紫外線として目にみえなくなり、仮に見続けたとすれば雪目状態のように裸眼を痛め、頭痛や吐き気を引き起こします。波長が赤色よりも長くなれば、赤外線や遠赤外線として肉眼で見ることは出来ませんが、人体は温かさとして感じ取ることが出来ます。

1879年エジソンが電球を発明したことにより、人類は技術による人工的な光を獲得しました。**人工照明**の始まりです。一方、人類進化の柱となった火の活用は、物質を燃焼させた炎を直接利用した**自然照明**でもあります。

人工照明はスイッチを押すだけで夜の<闇>を照らし、昼間のごとき明るさをもたらせます。そのスイッチさえも自動化され、今やヒトが近づくだけで自動的に点灯させる人間本位な時代です。さらに不夜城のごとき都市化は進み、ヒトの体内時計にインプットされていた「昼間働き、夜眠る」とした、古来のタイムスケジュールが変革されました。まさにこれを書く今は午前2時、私の体内時計は24時間エンドレス。

闇に光を当てる**人工照明**はヒト本位な文明を築きました。そのことが当たり前になってしまうと、ヒトの体内時計は勿論のこと、植物、動物、あらゆる生物の生活リズムを狂わせます。地球誕生46億年から遡ること、たった127年間の一瞬で、人類のライフスタイルは大きく変貌し、周辺の生物へも大きな影響を与えています。

これら人類の営みが、今まさに地球環境へ大きく作用を及ぼしています。その反作用とする地球温暖化や気候変動等をもたらせて、人類の営みにとっては<災害>となる結果を招いています。また自然に還元できない人工的の化学物質は環境ホルモンとして海や川に堆積され、魚貝類を通して再びヒトの口から体内へと還流、ヒトの成長過程でこれまでになかった新たな変化を引き起こしています。

かつてヒマラヤを登っていた頃、三ヶ月ものテント生活は<自然の中の光と闇>に従っていました。そして街に戻った時、裸電球の光は美しく輝いて見えましたが、すぐさま自然のリズムを無視した私本位な生活に戻ってしまった。しかし私の脳裏では自然の中で過ごした三ヶ月のリズムは確実に刻まれ、今もってまなお、その記憶の糸を辿ることができます。太陽輝く天空でさえ、その藍よりも深い暗黒に私は恐れを抱きました。

文明の進化は過去に遡る道程がなく、一方向に進む以外にないと思っています。だからこそ文化を育み、歴史として積み上げてきた過去の真実をふまえた新たな価値が求められます。<環境社会思考>こそ、今まさに様々提言し合う時ではないでしょうか。